

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 吉田ゆり子



学位申請者 石崎貴比古

論文名 日本における天竺認識の歴史的考察

【審査結果】

石崎貴比古氏から提出された博士学位請求論文『日本における天竺認識の歴史的考察』を慎重に審査し、2018年7月25日10時から本学アゴラグローバル3階プロジェクトスペースにおいて実施した最終試験（口述試問）の結果、本論文が評価基準に照らして、博士学位を授与する水準に達していると判断し、審査委員会は全員一致で、石崎貴比古氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるという結論に至った。

なお、審査委員は、石崎氏を本学外国語学部から今日まで主任指導教員として研究指導されてきた藤井毅（本学総合国際学研究院・教授）、同様に外国語学部時代からヒンディー語・インド研究者として指導されてきた水野善文（本学総合国際学研究院・教授）、日本思想史の立場から米谷匡史（本学総合国際学研究院・教授）、中国史・イエズス会宣教師研究を専門とする倉田明子（本学総合国際学研究院・准教授）、そして日本近世史研究の立場から吉田ゆり子（本学総合国際学研究院・教授）が務め、以上5人が審査委員会を構成した。

【論文の概要】

本論文は、6世紀に仏教伝来とともに、その教えが誕生した祖国として日本に知られるようになった「天竺」という概念が、今日知られる「インド」という場所に同定されていき、「インドの旧称」と認識されるに至った過程を歴史的に考察しようとした論考である。日本の歴史上、「天竺」と「インド」という言葉がどのように使用されてきたか、それらで使用されてきた文書史料や地図などの歴史資料を、古代から近代に至る時期を見渡し、とくに16世紀後期から19世紀の近世を中心とした時期を精査し、検討した労作である。

第1章では、日本における「天竺」認識を扱った先行研究を、(1)インド学、南アジア学分野における日印関係史研究、(2)日本史研究の中の対外関係史研究、という2つの学問分野から整理している。その結果、「天竺」に対する認識は、単独で醸成されてきたものではなく、隣国中国と「天竺」という存在を鏡にして、「本朝」である自画像を描いてきたという意味で、既存の学問分野を越えた巨視的な視座から論ずることが必要だと述べてい

る。

第2章では、「天竺認識の歴史」と題して、日本における「天竺」認識の変遷を概観している。まず、「天竺」という語の由来について、「身毒」「賢豆」「印度」など比較言語学的に確認をした上で、6世紀から16世紀半ばまでの時期の史料を用い、「天竺」が何を意味する言葉として用いられていたかを検討した。中国に渡った僧侶たちは、仏教の祖国である天竺では、仏教がすでに衰退していることを情報として得たが、これが逆に天竺に対する思慕を強める結果を生んだと推定している。国家的規模で仏教を推進してきた北宋の滅亡後、仏教の聖地（五臺山）は新たに建国された金の領地となり、直接インドとの結びつきが弱まったため、中国を通じてのみ到達可能な地であるとの認識が崩れてしまった。すると、天竺への現実の巡礼願望ではなく、観念的な思慕の念の高まりに変化していき、仏教の祖国としての認識が強まっていくと指摘する。このような事態を、石崎氏は「印度の天竺化」という。すなわち、「地理的な困難はあるものの物理的に到達可能であったはずの印度が、実際的には到達不可能な聖地として創造された天竺という概念に変貌していくこと」を「印度の天竺化」と呼んだ。

第3章では、「イエズス会士と天竺人」と題して、天竺認識の大きな転換点のひとつとしてザビエルなどイエズス会宣教師の来日を取りあげ、宣教師らが「天竺人」とよばれていた事実に着目した。その結果、宣教師らが仏教誕生の地である「天竺」という言葉を自らとなえながら、もし「天竺」が「インド」と同一であるならば、自らが本拠としていたゴアが「天竺」であったということになるが、当時の史料ではそのように認識されていたとはみられない。つまり、「天竺」が西欧的な地理認識でいう「インド」とは一致するものではなかったことを意味しているとした。

第4章では、「世界図に見る天竺認識－16世紀末～18世紀初頭の日本を中心として－」と題して、空間認識として世界図にみられる「天竺」を「インド」に同定してゆく作業がおこなわれる。すなわち、1602年に北京で出版されたマテオ・リッチの『坤輿万国全図』において「天竺」と「インド」が結合したことを確認した上で、17世紀半ばにこれが日本へ伝来して以降、朱印船貿易時代には「天竺」を東南アジアに漠然と比定してきた日本の世界図が、両者が結合した世界図となっていくことを明らかにした。また、ヨーロッパ製の世界図には「天竺」が記載されないため、そうした世界図にはあえて日本で「天竺」を記入したことも確認し、こうした事実から近世の日本の人々にとって「天竺」が大きな意味をもっていたことを指摘した。

第5章では、「知識人の天竺認識－西川如見、寺島良安の事例から－」として、西川如見の『増補華夷通商考』と寺島良安の『和漢三才図会』を取りあげた。両者は、世界が5つの大陸から成るとする「五大州」の概念を日本で受容した最初期の記述である。これを読み解くことにより、日本において中世以来存在したとされる本朝・震旦・天竺という三国世界観が「五大州」概念に取って代わられるとする先行研究に対して、『増補華夷通商

考』では「天竺」という言葉を基軸に世界を記述していること、『和漢三才図会』では中国版にはなかった「天竺」に関する記述を追加していることを指摘し、当時の知識人でさえ「天竺」認識から離れることがなかったと論じた。

第6章では、第5章の知識人に対して、「民衆の天竺認識－天竺徳兵衛と『五天竺』を中心に－」と題し、17世紀前期、寛永年間に2度「天竺」（東南アジア）に渡航したという実在の人物を素材とした歌舞伎・浄瑠璃と、『五天竺』という人形浄瑠璃、そして「大象図」に表された「天竺」認識を検討した。その結果、当時の民衆は、「五大陸」概念での世界観ではなく、「天竺」を題材にした世界観を受容し、しかも「天竺」とは西の方にある地で、キリシタン・謀反人というイメージを伴った、また象のような珍奇な生き物の住む場所として描かれていたのであると述べた。

第7章では、「宗教者の天竺認識－平田篤胤『印度蔵志』を例に－」として、仏教を批判した言説を展開する『印度蔵志』を、平田篤胤が仏典だけでなく最新の地理学や情報をもとに記述した論述と読み替え、篤胤の天竺像を明らかにしようとした。その結果、石崎氏は、篤胤が「五大州」概念に基づく世界認識のもとで、「天竺」を「仏教者にとって聖地だった場所を、蘭学の力を借りながらインドという現実的な存在感を付与しながら奪い取り、そして自らの古伝の体系の中に再定義しようとした。」（187頁）と述べ、「天竺」の相対化をなし遂げ、そうした異国・他者を鏡に、日本・日本人の自画像を構築したと指摘した。

終章では、各論の総括を行った上で、結論をまとめている。すなわち、「天竺」とは単なる「インドの旧称」ではなく、時代ごとに、また主体により、「天竺認識」は異なっていた。僧侶たちにとっては、仏教生誕の地として認識されながらも、聖地「天竺」が「インド」という場所に比定できた時には、皮肉にもすでに仏教はその地では衰退していたという現実があった。また、三国世界観から脱却した近世にあっても、「天竺」は知識人の間でも失われる概念ではなかった。とくに、地理的にも進んだ知識と情報を獲得していた平田篤胤でさえ、「天竺」を相対化する中で、自国認識を確立してゆくことになった。さらに、こうした近代以前の「天竺」認識が、近代における「インド認識」にどのようなつながっていくのか、否かを考察することが必要としながら、今後の課題とされている。

【審査の概要および評価】

審査委員会では、石崎氏の博士学位請求論文を受領した後、6月20日に審査委員会による事前審査をおこなった。その上で、7月25日の最終試験においては、30分程度の内容説明と、博士学位請求論文では画像が不鮮明であった第4章に掲載された地図の画像を投影することを石崎氏に求めた。7月25日の最終試験では、石崎氏は、各章ごとに内容を簡潔に要領よく説明し、問題の所在と結論を明解に説明した。その後、審査委員と氏の間で質疑応答をおこなった。その概要は、以下の通りである。

1. 研究史のとらえ方について

石崎氏は、第1章で多くの先行研究を紹介しているが、それぞれが均質に紹介されるかたちとなっているため、最も本論文と関係の深い応地利明氏と荒野泰典氏の研究の取り上げ方がやや軽微な扱いになっている嫌いがある。そのため、応地氏と荒野氏の研究とどのような点で異なるのか、本論文の研究史上のメリットはどこにあるのかとの質問がなされた。これに対し石崎氏は、これらの先行研究に深く学びながらも、近世に至っても「五大州」概念に移行せず、「天竺」認識に混乱が生じている点を、これまでは十分には説明しきれていないと考え、その解明に力点をおいて分析した旨の回答があった。

2. 分析対象としての歴史史料の扱いについて

第2章で分析対象として取り上げた文書史料の選定の仕方が十分であるか、また、第5章において近世における「知識人」として新井白石、その著述である『采覧異言』を取り上げなかったことに問題が残るのではないかと、との指摘があった。これに対して、石崎氏はその不十分さを認識していること、今後の課題とするとの回答があった。

3. 言語分析について

「天竺」という用語について、原語（サンスクリット、むしろプラークリット）から漢語に翻訳される際の音韻にかんしては、例えば辛嶋静志、『『長阿含経』の原語の研究—音写語分析を中心として—』（1994年、平河出版社）に代表される先行研究に依拠すれば、更に明確なことが言えたのではないかと、との指摘があった。

また、「SAT 大正新脩大蔵経データベース」を利用して用語の使用状況を調査しているが、例えば、インド撰述部、中国撰述部、日本撰述部の分類ごとに分析するなど、もう少し緻密に扱えば、新たな知見が得られたかもしれないとの指摘がなされた。

4. 世界観のとらえ方について

中世日本の三国世界像・「天竺」像については、仏教の聖地「天竺」から遠く隔たった「辺土」の日本で、いかにして人々は救われるのか、が当時の人々にとって重要な精神史的問題であったと思われる。本地垂迹説で、神々は仮の姿であり、本体は仏であると考えられたのも、「辺土」の日本の人々を救いに導く道筋を示すものであった。だからこそ、「天竺」への憧憬は切実なものであり、当時の世界像・コスモロジーの中で「天竺」は不可欠なものだったと考えられる。しかし、本論文の分析は、地図や地理書などの読解にもとづいて、地理的なイメージを扱うことが基本軸になっており、人々の精神史についてはやや平板な扱いに見える。その面はもっと掘り下げてみると良かったのではないかと、との指摘がなされた。

他方、平田篤胤の「印度蔵志」の分析は興味深い。ただし、平田篤胤が「天竺」の古伝

は皇国の古伝が伝播したものととらえ、両者の共通性・類似性を見出していたことについて、その背景となる世界像・コスモロジーをさらに検討すべきであろう。国学者たちの世界像・コスモロジーについて考えるには、本居宣長の「古事記伝」をうけて、図像によって世界の創造を描いた服部中庸の「三大考」と、その後展開された国学者の論争が重要である。そこでは、洋学の地理学・世界地図の知識もとりいれながら、日本の神々による天地創造と世界の形成や、死後の世界が語られ、皇国を中心とした世界像・コスモロジーが構想されていた。平田篤胤の「靈能真柱」なども、その影響のなかで書かれたものである。このような国学者たちの世界像・コスモロジーの展開をふまえなければ、平田篤胤の世界像や「天竺」像も十分に論じられないのではないか、と指摘された。

5. イエズス会宣教師と「天竺」との関係について

イエズス会宣教師が仏教徒とみなされた、と指摘されているが、宣教師は日本語を習得する過程で宗教用語を仏教から借りたという事実もあり、宣教師が最初から仏教用語で布教していた可能性は高い。そのため、イエズス会、つまり「天竺」とキリスト教が結びついていったのではないかとの指摘がなされた。

また、「天竺」が「インド」に同定されていく過程を追うのであれば、南天竺がシャムと同定されていった過程、そしてそれが否定されてゆく過程も取り上げてよかったのではないかという指摘もなされた。

6. その他、審査委員会として改善ならびに今後研究してゆく上で希望する点

(1) 歴史資料の扱い方についてである。漢文史料を引用し、分析する際、自らが漢文の和訳をせず、公刊されている和訳をそのまま引用し、和訳を分析対象としたため、実際には漢文史料では表記されていなかった事柄を自らの論拠とするといった誤りもみられる。厳密に史料に立脚するように今後改善すべきである。

(2) 膨大な文献に及ぶことから敢えて触れていないのかもしれないが、やはり「天竺」認識を論じる際、鎌倉期以降の浄土信仰との関係で民衆レベルでの情感こもる認識にも言及すべきであった。希求する西方極楽浄土と天竺の関係を論じる際には、民衆レベルでの認識を知ることは必要であったと思われる。『日本靈異記』（平安初期）、『三宝絵詞』（10世紀末）、『今昔物語集』（11世紀、平安後期）を検討しているので、それにつづく『沙石集』（鎌倉中期）、さらには「天竺」言及の有無は定かでないものの、落語の始原と言われる『醒醉笑』（江戸初期、安楽庵策伝）も調べてみる価値はありそうである。参考までに、関山和夫『説教の歴史－仏教と話芸－』（白水ブックス、1992、白水社）などによれば、僧侶たちの説法が庶民らの認識形成に大きな役割を果たしていたことが分かる。石崎氏の論文では、知識人たちの認識と峻別できる要素が明確になっていることから論考の妥当性を否定するものではないが、文芸化された天竺徳兵衛や、人形浄瑠璃の『五天竺』

は、むしろ高尚なエリート文化であり、実は民衆文化の実態的様相とは言いがたいのではないか。「大象図」も、どの次元の「民衆」が触れることができたのか、今後「民衆」の多様性も意識して検討をしてゆくことが必要であらう。

(3) 『具舎論』など、仏教世界そのものに関する言及がない。仏教世界そのものを研究していた僧侶、知識人と、その教えを受ける一般民衆の「天竺認識」との相違を整理しておいた方がよかったのではないか。

(4) 廃仏論、ならびに本地垂迹説の中でのインドイメージの展開について、今後詳細に検討した結果を公表してゆくことが必要ではないか。

(5) ヨーロッパにおけるインド認識も歴史的に検討していくことが必要ではないか。

以上、最終試験において、上記のような意見がだされたものの、それに対する石崎氏の応答は、自らの論文に依拠した成果と問題点を十分に踏まえたものであった。

審査委員会としては、上記のような課題は残されているものの、今回まとめられた博士学位請求論文『日本における天竺認識の歴史的考察』は学位論文としての水準を越える力作であること、また、何よりも石崎氏自身が自らの論文の問題点と今後なすべき課題を十分に認識しており、その研究に向けた準備も進めていることを確認した。そこで、審査委員会は全員一致で、石崎貴比古氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。